

茅 風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2020年6月10日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信60号



- 1月～6月上旬の活動報告(事務局).....1
- 写真・五月の上ノ原(夏目啓一郎).....1
- 第19回定期総会関係報告.....2
 - ◇北山塾長、草野下流部会長就任挨拶
 - ◆総会はコロナ禍により書面決議で開催
 - ◆2020年度の主な活動計画・日程
 - ◆2020年度の役員構成・新幹事より一言
- 流域連携と流域コモンズ活動報告(稲 貴夫).....4
 - ◇小貝川と菅生沼の野焼きに参加
- 檜原村・ムラサキプロジェクト視察報告(草野 洋).....5
 - ◇上ノ原のムラサキ復活を夢見て
- 藤原だより(北山 郁人).....6
- 編集後記(敬称略、リレー投稿・野守のつぶやきは休載)

【1月】

- 22日 北山塾頭(当時)、川場村の世田谷区民健康村の茅場保全活動を訪問、見学。
- 25日、26日 流域連携活動として、小貝川、菅生沼の野焼きに参加。小貝川5名、26日菅生沼9名参加。

【3月】

- 7日、8日に予定していた「キャンドルナイト・雪原トレッキング」は新型コロナウイルス感染リスクに鑑み中止。
- 17日 草野塾長、北山塾頭、他2名、ムラサキの栽培プロジェクト視察のため東京都檜原村訪問。
- 「みなかみBR生物多様性保全推進協議会」(2019年5月にみなかみ町エコパーク推進課、群馬県立博物館、NACS-Jにより設立)の協力メンバーとして、塾長、塾頭他2名を登録。

【4月】

- 第17回定期総会実施。感染症対策のため書面決議で実施。塾長が草野から北山に交代、新たに下流域

部会を発足させ草野事務局長が部会代長を兼務、2名が新たに幹事に就任し、新執行部が発足。

- 11日 初めての試みとして幹事会をWEBで実施。
- 25日、26日に予定されていた野焼きは中止。
- 30日 「在宅講座」実施。感染症対策で活動が制約される中、「学習会」や「車座講座」に代わるものとして会員にテキストを配信。第1回目は「サクラはどこから来たのか」(作成・草野)

【5月】

- 6日 第2回在宅講座テキスト「冬芽には希望が詰まっている」(作成・草野)配信。
- 12日 第3回在宅講座テキスト「上ノ原の最新の写真」(撮影・夏目)配信。

【6月】

- 8日 第4回在宅講座テキスト「上ノ原の動物たち」(作成・北山、センサーカメラ写真)配信。

(以上)



Photo: 夏目啓一郎 5月11日撮影

■第19回「定期総会」を書面により実施 北山塾長、草野事務局長・下流部会代表による 新体制のもとに、上ノ原の保全と活用を目指す

第19回定期総会は4月4日に都内で開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染防止のため予定していた会場が使用できなくなり、さらに感染の拡大が懸念される状況となったことから、今年度の総会は書面により会員の意志を伺う書面方式での実施となりました。

議決権行使書は4月10日締め切りで回収されましたが、何れも賛成多数で2019年度事業報告及び会計収支及び2020年度事業計画及び会計収支予算案は承認されました。

役員選任では、新たに塾長に北山郁人、事務局長兼下流域部会代表に草野洋が選任され、また幹事として今年度から藤岡和子、夏目啓一郎の二人が加わりました。その他、会則改正では新体制発足にともなう事務所所在地の変更などとともに、新たに群馬県在住者の入会金免除が定められました。

今年度の主な活動計画及び役員構成等をお知らせ致しますので、会員及び地元の皆様の御参画、ご支援をよろしくお願い致します。

塾長及び事務局長・下流域部会代表の挨拶

森林塾青水塾長 北山郁人

この度、三代目森林塾青水塾長に任命されました北山郁人(きたやま いくと)と申します。

森林塾青水との出会いは2007年の夏でした。当時は東京都奥多摩町の山村に暮らしていましたが、活動の拠点を別の場所に移そうと思い、いろいろな山村を見て回っていました。藤原集落のことは、趣味で所属していた沢登りの山岳会で、みなかみ町藤原の奈良俣川源流遡行に出かけたおりに知りました。直感的に面白い場所だなと思い、いろいろ調べていたときに、森林塾の活動をインターネットで見つけました。



その後、奥多摩から通いながら森林塾の活動に参加するようになり、当時、塾長をしていた清水さんやみなかみ町役場の協力により、理想の環境の古民家を無事み

つけることができました。半年間は奥多摩から通いで古民家の修復を行い、2009年の4月に無事に引越しをすることが出来ました。

それからあっという間に10年が過ぎ、当時3歳だっ

た長男も中学3年生になりました。二代目草野塾長のもとでは、現地事務局長兼塾頭をつとめさせていただき、この度いよいよ塾長という事になりました。3年前から自伐型林業の試みとして、周辺のみズナラ林に作業道を整備し、間伐、炭焼き、薪づくりを試行してきました。茅場と同じで、森に人の手が入ると格段に生物の多様性が増えてきます。今後は、このみズナラ林と茅場をセットで、里山の原風景として整備していきたいと思います。

各地の山村を見てきた経験からも、この上の原に茅場が残っているのは、本当に奇跡だと思います。いろいろな条件が重なり残ったのだと思いますが、どこもかつての茅場は植林しやすい為、人工林になってしまっています。この貴重な場所をこれからも守り育てていけるように皆さんと活動していきたいと思っています。よろしくお願い致します。

事務局長・下流域部会代表 草野 洋

新型コロナウイルスの感染が社会・経済・暮らしに深刻な影響を与えている中、皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年の総会において2020年度からみなかみ・藤原地域が主体となった塾運営となる新たなステージに移行する構想をお示しして、今年度は、新たな体制のもと魅力あるプログラムを企画していたところですが、緊急事態宣言の発令を受け、現在は移動や集合を伴う活動を休止、上ノ原の野焼もできず、オオヤマザクラも見れず出鼻をくじかれて悔しい想いをしています。

さて、私は、2008年に入塾し、2014年、清水初代塾長から塾長を引き継ぎ、この間、藤原や上ノ原の茅場とみズナラ林をフィールドに皆様と一緒に楽しい時間を過ごさせていただきました。

今後は、事務局長として、塾運営に携わり、北山体制を支えます。

下流域部会長としては、まずは、茅場やみズナラ林の保全作業のサポート部隊として、これまで通り上ノ原に通い、みなかみ・藤原の地域関係人口として活動するとともに、環境問題など皆様の関心ごとに関するボランティア・ツアーや学習会を行ってまいります。

今は、この厳しく辛い自粛期間をAfter Coronaの準備期間と捉えて、もうしばらく頑張らしましょう。上ノ原も皆様に逢えない寂しさに耐えて待っていてくれるでしょう。

皆様の心身の安全を心からお祈りして上ノ原での再会を楽しみにしています。



2020年度事業計画の骨子

- ・都市、地元、利根川流域の住民が**飲水思源の志**でつながり、楽しみながら汗を流す。
- ・**人と自然のほどよい関係**で、生き物たちでにぎわう上ノ原の「入会の森(茅場・ミズナラ林)」を管理・利用する仕組みを築く。
- ・**継続はチカラ・そしてタカラを創る。**

青水の新たなステージ2020

地域が主体となった運営



下流域は

「地域関係人口」の一員としてかわり続ける。



▶上ノ原は流域のタカラ、
生物多様性の宝庫

上ノ原・藤原には、まだまだ知らないことが多くある。地域と下流域住民が力を合わせて磨き上げましょう。

◆2020年度の主な活動計画・日程について◆

新型コロナウイルス等の影響で今後も延期、中止する場合があります。事前にホームページを確認下さい。

月	主な活動予定(定例活動・楽習会・流域連携等)
	4月4日に予定していた総会は書面方式で実施し、セミナーは中止しました。以降、6月までに予定していた定例活動①「野焼き・山の口開き」、定例活動②「ゆるぶの森整備」、「麗澤中学校樹木観察会」、定例活動③「日光土呂部茅場連携作業」等も中止としました。
7	定例活動④防火帯刈払い・植物調査/4(土)・5(日) *会員限定の活動となります
8	楽習会/期日場所未定
9	定例活動⑤ミズナラ林整備・自伐林業体験/5(土)・6(日) 楽習会・川場村での茅屋根づくり体験/19(土)・20(日)
10	定例活動⑥茅刈り/31(土)・11月1(日) 茅刈りウィーク/31(土)～11月8(日) 麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク/期日未定 地元茅刈り衆による茅刈り/下旬
11	定例活動⑦茅出し・山の口終い/21(土)・22(日)
12	活動予定なし
1	楽習会・流域連携活動、小貝川・菅生沼の野焼き/23(土)・24(日)予定
3	定例活動⑧キャンドルナイト・雪原トレッキング/6(土)・7(日)

◆今年度役員構成◆

～塾長・事務局長・幹事・顧問・相談役等紹介します～

塾長・みなかみ事務所長

北山 郁人 全般統轄
地元・みなかみ町役場、支援企業との連携等 資材等の管理

事務局長・下流域部会代表

草野 洋 全般にわたる企画・管理
全般統轄補佐 下流域部会統括

幹事(*は新任)

稲 貴夫 広報(「茅風」編集長)、東京楽習会、総会/セミナー 会計監査兼務
岡田伊佐子 麗澤中「樹木観察会/FW」、自然ふれあい学習、東京楽習会、総会/セミナー

尾島キヨ子 麗澤中「樹木観察会/FW」、下流域プログラム補佐、茅刈り合宿

*夏目啓一郎 地元の活動参画促進、NPO 奥利根水源ネットワーク、地域貢献プログラムほか

西村 大志 WEB 管理)、助成事業、広域連携補佐(草原再生ネット、草原サミット)、麗澤中(統括、窓口)

*藤岡 和子 児童青少年の教育プログラム企画実行、コモンズプログラム企画開発、茅刈り合宿補佐

増井 太樹 広域連携(草原再生ネットワーク)
松澤 英喜 事務局長補佐(予算管理、会員管理、総会、幹事会ほか)、定例活動関連事務、助成事業補佐、WEB管理補佐、会計・出納

吉野 一幸 地元代表

顧問

安楽勝彦 笹岡達男 滑志田隆 清水英毅

オブザーバー/相談役

高橋 英俊 行政／みなかみ町役場窓口（エコ・パーク推進課次長兼係長）

林 親男 地元関係相談役（藤原案内人クラブ）

川端 英雄 アドバイザー

新幹事からも一言ご挨拶申し上げます！

夏目啓一郎

この度、幹事に就任しました夏目啓一郎です。

五年前にさいたま市からみなかみ町藤原へ移住しました。みなかみ町に移住した決め手はいくつかありましたが、そこに暮らす人の優しさやたくさん的大自然。上ノ原の風景もそのひとつです。

幹事の肩書に見合う仕事ができるか不安ですが、藤原暮らしならではの目線で皆様に喜んでもらえるような働きができればと思います。宜しくお願い致します。

藤岡 和子

この度、幹事に就任しました、藤岡 和子と申します。青水との出会いは、6年前の7月、大汗をかきながらの防火帯刈り払い作業でした。体を動かすことが楽しいから参加するという動機から、回を重ねるごとに知る、人と自然と暮らしの共存「入会地」と、一流域一コミュニティとする「飲水思源」の考えに、感銘を受けていきました。

この喜びを次世代に繋ごうと想い始めた頃、幹事のお話を頂きました。無知で未熟者ですが、「当たってなんぼ」の性分で生きています。物怖じせず、先輩方に支えて頂きながら、皆様と共に学んでいきたいと思っています。宜しくお願い致します。

■流域連携と流域コモンズ活動報告

ー小貝川と菅生沼の野焼きに参加ー 稲 貴夫

1月25日の小貝川の野焼きに青水からは5人が参加しました。一週間前は雨の予報が刻々と変わり、前日の予報は晴天でした。しかし当日の常総市を流れる小貝川の天候は薄曇り。

朝9時に堤防上の広場に60人程の参加者が参集、茨城県自然博物館の小幡さんの司会で開会しました。主催者の「小貝川の自然を守る会」的場代表が挨拶。来賓として神達常総市長及び国交省河川局、環境省他関係団体がそれぞれ挨拶、紹介されました。

挨拶での興味深い話題を紹介します。一つは、小貝川の現在の姿は、昭和61年8月4日、台風10号による記録的な大雨で堤防が決壊し、150年に一度といわれる大洪水に見舞われたことに原点があるという話です。それにより遊水地の造成など、大規模な河川改修が行われたのでした。

そして、その大洪水をきっかけに、流域の住民が交流しながら小貝川の自然や文化、歴史を伝えていくという取り組みが具体化し、全国の先駆けとなったという話です。尚、茨城県ではここにだけしか生息しないヒメアマナの開花は年々早くなり、4月5日に予定している見学会には、すでに花が終わっているかもしれないとの話もありました。

肝心の野焼きの方は、一昨日の雨の影響で地面もオギもまだ湿っていて、着火してもうまく燃え広がりません。それで刈払い機で草を倒し、そこに小まめに火を入れていく方式で、午後一時頃までかけて3カ所の野焼きが行われました。

翌 26 日の菅生沼の野焼きには青水から9人が参加しました。集合は菅生沼ふれあい広場。150人近くが集まってきました。

受付を済ませ、9時から開会式。最初に「菅生沼を考える会」の佐賀会長があいさつし、5月に予定しているタチスミレ観察会の案内がありました。続いて神達市長が、オリンピックの聖火ランナーがあすなろの里を通るので、その機会に菅生沼をアピールしたいと挨拶しました。

今年の野焼きは、真ん中に仮設防火帯を切って上流と下流の2カ所に別けて実施されました。9時過ぎから小一時間ほどは、レーキを使って防火帯の燃料を掻き寄せる作業。併せて、去年の台風による洪水で空き缶やペットボトルなどのごみが流入したため、ゴミの収集も行われました。

今日も雨こそ降らないものの曇天、微風という状況の中、10時過ぎに上流の風下側から火が入りました。やはり昨年のように燃え広がらず、半分ほど焼け残りました。下流側も同様で、あとは燃え残ったオギを刈払い機で倒して、燃料の密度を高めてから点火し、燃え残りそうになると少しだけ掻き寄せて焼くという感じで、少しまだらではありますが、今年の野焼きが終了しました。



今年の小貝川・菅生沼の野焼きは名実ともに不完全燃焼のところもありましたが、この繰り返しが野焼きの技術向上と希少植物の保全にむすびついていると感じました。

※その後、新型コロナの影響で、見学会も聖火リレーも中止になりましたが、来年に期待したいです。

■ 檜原村・ムラサキプロジェクト視察報告 ー上ノ原のムラサキ復活を夢見てー 草野 洋

上ノ原のススキ草原が200haほどあった昭和40年(1965年)以前には、上ノ原にもムラサキ(紫)が生えていたという。

ムラサキは、ムラサキ科の多年草で、初夏から夏にかけて小さな白い花をつける。抗炎症作用、創傷治癒促進、殺菌作用がある有用な生薬であり、青みがかかった紫色の日本の伝統色の染料でもある。

あかねさす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る(巻1・20)

など10首が万葉集に登場するほど歴史は古く、奈良時代から江戸時代末期まで栽培されていたが、明治時代以降は合成染料の登場により商業的価値が減少し、自生のムラサキは植栽や開発による草原の減少とともに絶滅危惧種レッドデータブック 1Bにランクされるまでになってしまっている。

かつて上ノ原にあったということは、上ノ原がムラサキの生育に適している土地であり、これの復活が「ふるさと文化財の森」に設定された上ノ原茅場の究極の再生ではないかと考えて活動のなかで取り組むことにした。

そこで、3月17日、北山さん、稲さん、松澤さんと東京都西多摩郡檜原村で「江戸むらさき」の栽培に取り組んでいる「ひのはら ムラサキプロジェクト」を訪問した。

このプロジェクトは、在来ムラサキを次世代に継承しようと、一般社団法人 湯久保宿を主体に取り組まれているもの。湯久保宿代表の丸山美子さん、ご主人の二郎さんから湯久保宿のムラサキ栽培活動についてお聞きした後、高橋園芸の高橋亨さんの温室を訪問してムラサキの特徴や栽培方法などについて教えていただきました。

檜原のムラサキは1957年(昭和32)年に松生山(旧茅場)で下刈り中に偶然発見されたもので、その子孫が大切に栽培されてきた。それを引き継ぐ形で丸山美子さんが代表を務め

た草木染愛好会と村の人々の手で大切に受け継がれ、現在に至っている。2014(平成26)年には、農業生物資源研究所(つくば市)に「檜原在来ムラサキ」としてジーンバンク登録もされた。

江戸時代にはこの付近のムラサキで染めた布は、青みがかかった紫色「江戸むらさき」として珍重されてきた。東京都の無形民俗文化財に指定され、江戸時代から伝わるこの地区の祭「小沢式三番(さんば)」に登場する翁の衣装にも、ムラサキで染めた布が使われている



ムラサキで染めた布



そう、ムラサキがこの地に自生していたことがわかる。

これからは、この貴重な在来種のムラサキを草木染などに活用して「檜原ブランド」に育てたいと丸山さんはおっしゃっていた。

高橋さんの温室では2月に播いた実生が発芽し始めていた(写真・左上)。昨年の2年生の苗もすくすく育っている(写真・左上)。

多年草であるから秋には地上部が枯れるが、株から新芽が出てくる(写真・左)。

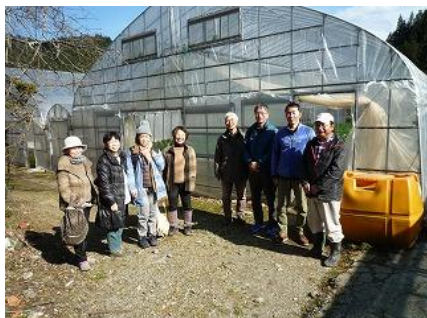
根は1年生でもポットの中にぎっしり詰まりこれが染料の材料になる(写真・左)。

種は10月頃に獲り、川砂と混ぜて冷蔵庫で保存するそうだ。

高橋園芸の温室の中のムラサキ

高橋さんは開口一番、微笑みながら「ムラサキは気難しい植物だ」とおっしゃった。

発芽率も低く、発芽時期が一定でないようだ。しかし、適切な施肥により発芽した後の成長は早く、種は低温にさらし休眠打破させる必要があるようで、冷蔵庫で貯蔵するようになって発芽率が上がったようだ。上ノ原の場合、秋に取り撒きすれば、雪の布団の下は冷蔵庫と同じ状態なので休眠打破が自然状態で出来る。そのほか、根の成長を促進する肥料（カリ分）が必要なこと、いい色を出すために根を赤くする肥料を施すことなど貴重な技術情報をいただきました。



お世話になった皆さんとともに

ムラサキは水はけがよい朝日の当たる斜面を好む。上ノ原茅場の中で、このような条件のところを選んで播種すれば雪の布団で休眠打破させ、根の成長に効果のある野焼で出来

た本草灰(カリ分)があるので生育に好条件である。復活の可能性は非常に高いと自信が出てきた。

藤原の高壮齢の方は山野草の栽培が得意である。これらの方々の力を借りて上ノ原のムラサキを復活



させるとともに、休耕田などで栽培して、将来は、紫根、生薬、ポット苗などを藤原ブランド「奥利根ムラサキ」にしたいと、夢は膨らんでゆく。

藤原現地事務所報告

自伐型林業で、上ノ原周辺で間伐したミズナラを使った原木舞茸栽培に挑戦！

北山 郁人

一般的にスーパーで売られているマイタケは菌床栽培といって、おが屑をブロック状に固めたもので栽培されていますが、原木（丸太）で栽培するとマイタケのじくが大きく天然に近いものが収穫できるそうです。ただし、手間がかかるので、あまり普及していません。

直径 10～25 センチのミズナラを 15 センチほどに玉切り、1 日水につけた後、専用の培養袋に入れて高温で殺菌消毒をしなければなりません。ドラム缶で煮る場合 5～6 時間かかります。今回は、元キノコ農家の方に指導していただき、昔使っていた高压釜で殺菌してみました。



写真解説

上左・専用の培養袋。丸いフィルターは NASA が開発？空気は通すが雑菌は入らない構造

上右・高压釜で殺菌

下・雑菌が入らないように素早く植菌



冷えた原木に雑菌が入らないように注意して、マイタケの種菌を素早く原木の上にまき、ビニール袋を密閉しなければなりません。マイタケ菌は、他の雑菌よりも弱いので注意しないとカビの生えた原木になってしまいます。

そのまま、適温の場所に安置しマイタケ菌を培養します。菌がうまく回れば、一安心。秋になったら土に埋め翌年の秋から 3～5 年間、立派なマイタケが収穫できるはず？こうご期待です。

雑菌に負けずにうまく培養できれば、本当かウソか、日当換算で 3 万円の利益になるそうです。

自伐型林業で環境を保全しつつ、伐採した木でマイタケを栽培して付加価値をつけて、地域の食材として提供するというストーリーで売り出していきたいと思っています。

～編集後記～

前号で「子年(ねどし)は物事が新しく始まる年回り」と書いたら、新型コロナが蔓延。青水も現地で活動の自粛せざるを得ない事態となりました。

総会も急きょ文書決議での実施となりましたが、幹事会は web 会議で実施し、草野局長の発案で在宅講座が企画され、これまでに四回実施しました。

「現在の上ノ原を見たい」という声には、地元在住の夏目幹事が応えてくれました。五月の陽射しを受けて輝く上ノ原の写真は、「在宅講座」テキストとして配信され、その一部を表紙に掲載しました。

五月末に緊急事態宣言も解除され、定例活動も間もなく再開の予定。三代目北山塾長のもと青水は、一層藤原に軸足を置いた活動を目指します。(稲)